

教養試験 (行政「一般方式」)

No.	科目	出題内容	正解	正答率	講評
1	文章理解	内容把握	3	A	<b>【文章理解】</b> 現代文：例年どおり内容把握2題、文章整序1題、空欄補充1題の計4題の出題であった。内容把握の2題は正答が判断しやす。No.4空欄補充は、最終的に副詞「よしんば」「なまじ」の意味を知っているかが、正解が導けるかのポイントであった。成績診断において、No.3文章整序の正答率がやや低い。肢4が正答であると判断できる問題ではあるが、肢1を選んでしまうのもやむを得ないかもしれない。空欄補充、文章整序は昨年よりも難易度が高いと捉えられる。 英文：例年どおり内容把握4題の出題であった。難易度は例年と比較して大きな変化はなかったが、他の設問と比べるNo.6とNo.8がやや解きにくい問題であった。No.6は選択肢の2頭や5頭といった数字と本文のtwoやfiveという数字が合致しており、正解だと判断したくなるが、数字の合致だけで判断をせずに丁寧に肢を検討する必要があった。
2		内容把握	4	A	
3		文章整序	4	B	
4		空欄補充	2	A	
5	英文理解	内容把握	3	A	<b>【判断推理/数的推理】</b> No.9~13に関して、集合算、場合の数、確率2問、判断推理(今年は「真偽問題」)の順に出題されたところは昨年と変わらなかった。 一般的に難易度も昨年と大きな違いはなく標準的であったが、3問ほど新傾向となっていた。No.9集合算では、「ある数値が確定するために、他のどの数値が必要か」という問われ方の問題であり、多変数連立方程式の解法を要する。No.13真偽問題では、いわゆる「正直者(常に正しい発言をする)」と「嘘つき(常にうそ発言をする)」以外に「気まぐれ屋(どちらもあり)」が混じっており、定番問題から意図的に「ひねり」が加えられていた。No.14フローチャートに関するものが出題されたが、国家系や特別区で「情報問題」が最近出題されていることの影響か。ただし、フローチャートの基礎知識がなくても理解できるように配慮されたものであり、選択肢を検証すれば簡単に答えが出るものであった。計量問題に関しては、昨年の2問から1問(No.16)に減った。平行線と相似に関する、ひねりのない定番的問題であった。
6		内容把握	5	B	
7		内容把握	2	A	
8		内容把握	4	B	
9	判断推理/数的推理	集合算	4	A	<b>【資料解釈】</b> No.18、19が「実数」、No.20が「増減率」、No.21が「構成比」の計4問の出題であり、ここ数年と変わらない出題傾向であった。最近数年間の過去問を解いていけば、どの問題もほぼほぼ正答できるものであったと思われる。 <b>【空間概念】</b> これも例年通り、No.22~24の3問の出題であり、そのうちの1問は「軌跡」に関するものであった(昨年は2問)。No.23は正二十面体の頂点・辺の個数に関する問題であり、正多面体問題の基本中の基本である。No.22の「平行四辺形の個数」、No.24の「軌跡」の問題はいずれも難易度は高くないが、解く上での「丁寧さ」(前者は「数える丁寧さ(対称性からの工夫が有効)」、後者は「絵を描く丁寧さ」)が要求される。ただし、No.24に関しては、「1周して元の位置に戻る」という記述を、「1周して元の状態に戻る」と読むと、平行四辺形が「360°の整数倍」回転したことになり、答が「6の倍数」で正答が得られる。 <b>【人文科学】</b> 歴史：日本史から1題、世界史から1題の出題は例年通りである。大正時代の日本について、選択肢に細かい部分があるが、正解肢が基本であったことから、人文科学の中では最も正答率が高かった。上位25%の受験生に限ると3分の2の方が正答している。明・清の時代については、東京都I類B択一記述公開模試でも出題しており、正解肢も同一の内容であったが、正答率が低く、残念である。 地理：東南アジアからの出題であった。東南アジアに関する基本問題であったが、正答率が低く、受験生が人文科学を捨てていることが伺える。 文化：ここ10年では思想の出題がなかったため、人文科学の中では最も低い正答率となった。本問で取り上げられている思想家は、ベーコンを除いて政治学でも学ぶものであるから、政治学の知識で誤り肢を判断し、消去法で正解肢にたどりつけたはずなのだが、恐らく出題者はもっと高い正答率を想定していたであろう。
10		場合の数	2	B	
11		確率	4	A	
12		確率	1	B	
13		真偽	3	A	
14		フローチャート	2	B	
15		約数・倍数	5	B	
16	平面図形の計量	平均算	2	B	
17		平均算	2	B	
18	資料解釈	グラフ(実数)	4	A	<b>【人文科学】</b> 歴史：日本史から1題、世界史から1題の出題は例年通りである。大正時代の日本について、選択肢に細かい部分があるが、正解肢が基本であったことから、人文科学の中では最も正答率が高かった。上位25%の受験生に限ると3分の2の方が正答している。明・清の時代については、東京都I類B択一記述公開模試でも出題しており、正解肢も同一の内容であったが、正答率が低く、残念である。 地理：東南アジアからの出題であった。東南アジアに関する基本問題であったが、正答率が低く、受験生が人文科学を捨てていることが伺える。 文化：ここ10年では思想の出題がなかったため、人文科学の中では最も低い正答率となった。本問で取り上げられている思想家は、ベーコンを除いて政治学でも学ぶものであるから、政治学の知識で誤り肢を判断し、消去法で正解肢にたどりつけたはずなのだが、恐らく出題者はもっと高い正答率を想定していたであろう。
19		グラフ(実数)	4	A	
20		グラフ(増減率)	5	A	
21		グラフ(構成比)	2	A	
22	空間概念	平面図形の分割・構成	2	C	<b>【社会科学】</b> 社会科学は、例年どおり、法学、政治、経済から各1問ずつの出題である。法学からは民法の基本原則が出題されたが、内容は基本的な問題ともいえる。政治からは各国の政治制度であり、典型的かつ平易な問題なので、是非得点源としたい問題である。経済からは国債であるが、社会科学としても、時事問題としても対応可能な問題といえる。いずれも基本レベルであり、全問正解は十分可能といえる。 <b>【自然科学】</b> 物理：No.32は、等加速度直線運動の計算問題であり、公式の丸暗記ではなく、加速度の意味をしっかりと理解できていけば、v-tグラフを描くことで移動距離を求めることができた。2010年には自由落下、2023年には鉛直投げ上げ運動が問われてきた。なお、計算問題は5年連続となった。 化学：No.33は、身近な物質のpHについて問われ、小学校や中学校で学んだであろう酸性、中性、塩基性の強弱に関する感覚があるかどうかが大切であるといえる。 生物：No.34は、ヒトのホルモンの基本的な内容が問われている。2016年の技術系のみ問題にも似たような類題があった。また、選択肢2、4は過去にも同様の内容が問われていた。やはり、過去問演習は重要である。 地学：No.35は、日本の天気について問われ、東京都では初めての出題テーマであった。誤りの記述は見つけやすく解きやすかったと思われたが、意外と正答率は伸び悩んだ。
23		立体図形	1	B	
24		軌跡	4	C	
25	人文科学	近代西洋の思想	1	C	<b>【社会科学】</b> 社会科学は、例年どおり、法学、政治、経済から各1問ずつの出題である。法学からは民法の基本原則が出題されたが、内容は基本的な問題ともいえる。政治からは各国の政治制度であり、典型的かつ平易な問題なので、是非得点源としたい問題である。経済からは国債であるが、社会科学としても、時事問題としても対応可能な問題といえる。いずれも基本レベルであり、全問正解は十分可能といえる。 <b>【自然科学】</b> 物理：No.32は、等加速度直線運動の計算問題であり、公式の丸暗記ではなく、加速度の意味をしっかりと理解できていけば、v-tグラフを描くことで移動距離を求めることができた。2010年には自由落下、2023年には鉛直投げ上げ運動が問われてきた。なお、計算問題は5年連続となった。 化学：No.33は、身近な物質のpHについて問われ、小学校や中学校で学んだであろう酸性、中性、塩基性の強弱に関する感覚があるかどうかが大切であるといえる。 生物：No.34は、ヒトのホルモンの基本的な内容が問われている。2016年の技術系のみ問題にも似たような類題があった。また、選択肢2、4は過去にも同様の内容が問われていた。やはり、過去問演習は重要である。 地学：No.35は、日本の天気について問われ、東京都では初めての出題テーマであった。誤りの記述は見つけやすく解きやすかったと思われたが、意外と正答率は伸び悩んだ。
26		大正時代	5	B	
27		明・清	2	C	
28		東南アジア諸国	5	C	
29	社会科学	民法の基本原則等	1	B	<b>【自然科学】</b> 物理：No.32は、等加速度直線運動の計算問題であり、公式の丸暗記ではなく、加速度の意味をしっかりと理解できていけば、v-tグラフを描くことで移動距離を求めることができた。2010年には自由落下、2023年には鉛直投げ上げ運動が問われてきた。なお、計算問題は5年連続となった。 化学：No.33は、身近な物質のpHについて問われ、小学校や中学校で学んだであろう酸性、中性、塩基性の強弱に関する感覚があるかどうかが大切であるといえる。 生物：No.34は、ヒトのホルモンの基本的な内容が問われている。2016年の技術系のみ問題にも似たような類題があった。また、選択肢2、4は過去にも同様の内容が問われていた。やはり、過去問演習は重要である。 地学：No.35は、日本の天気について問われ、東京都では初めての出題テーマであった。誤りの記述は見つけやすく解きやすかったと思われたが、意外と正答率は伸び悩んだ。
30		各国の政治制度	1	A	
31		日本における国債	1	B	
32	自然科学	等加速度直線運動	3	B	<b>【社会事情】</b> 社会事情は、例年どおり5問の出題で、消費者白書、最低賃金改定、高市総理の所信表明演説、サイバー対処能力強化法、G7サミットとなっている。消費者白書は、白書からの出題は頻出なので、予想され得る問題といえる。最低賃金改定は報道等でもおおきく取り上げられた話題であり、正解肢を導きだせる内容である。また、内閣総理大臣の所信表明演説は、近年は公務員試験の頻出テーマとなっているので、是非得点しておきたい。サイバー対処能力強化法は、一見すると馴染みがなさそうだが、日ごろから時事問題に注意していれば、選択肢を絞りこめるものである。G7サミットは頻出テーマであり、典型的かつ平易な問題といえる。よって、5問中4問以上正解しておきたい。
33		身近な物質のpH	2	A	
34		ヒトのホルモン	4	C	
35		日本の天気	5	C	
36	社会事情	令和7年度版 消費者白書	5	A	<b>【社会事情】</b> 社会事情は、例年どおり5問の出題で、消費者白書、最低賃金改定、高市総理の所信表明演説、サイバー対処能力強化法、G7サミットとなっている。消費者白書は、白書からの出題は頻出なので、予想され得る問題といえる。最低賃金改定は報道等でもおおきく取り上げられた話題であり、正解肢を導きだせる内容である。また、内閣総理大臣の所信表明演説は、近年は公務員試験の頻出テーマとなっているので、是非得点しておきたい。サイバー対処能力強化法は、一見すると馴染みがなさそうだが、日ごろから時事問題に注意していれば、選択肢を絞りこめるものである。G7サミットは頻出テーマであり、典型的かつ平易な問題といえる。よって、5問中4問以上正解しておきたい。
37		令和7年度最低賃金改定	3	B	
38		高市首相所信表明演説	2	A	
39		サイバー対処能力強化法	4	C	
40		G7サミット	2	A	

※ 正答率 (A : 60%以上、B : 40%以上 60%未満、C : 40%未満) は、LEC公務員試験 受験生応援企画『本試験無料成績診断』のデータ (5/11 14:00 時点) に基づいて算出しています。本成績診断のご利用方法等の詳細は、LEC公務員 Web サイトの専用ページ (<https://www.lec-jp.com/koumuin/juken/seiseki/>) にてご案内しています。



KL25658